篠原幸雄からやましたゆきおへ
マンガと生きた50年
10
「ふしぎな仲間たち」その2

ネット配信版・新つれづれ草に掲載の「マンガと生きた50年」は、東京都江東区・森下文化センターにて2017年10月20日（金）から29日（日）の会期で開催しました、新つれづれ草マンガ展「篠原幸雄からやましたゆきおへ　マンガと生きた50年」で展示した展示物を再構成したものです。

10、「ふしぎな仲間たち」その2

「負けずの大五」第2部放浪編を描く

「ふしぎな仲間たち」の仲間は「つれづれ草」のときとは違う、同じ意志を持って集まった人たちです。僕のように、描きたいものはあるけど、今の商業誌ではなかなか発表の場を持てない人たちが多かったですね。

「つれづれ草」の仲間はその後それぞれマンガ家を目指していく、精神的なライバルになっていきました。「ふしぎな仲間たち」では「商業誌」を作るんだとがんばっていましたが、今考えると同志が集まって作った、本当の意味の「同人誌」だったと思えます。

「ふしぎな仲間たち」には、『負けずの大五』の続編を描きました。アシスタントも使わず、全部自分で描いたので、かなり思い入れのあるものに仕上がったと思います。

マンガの可能性を信じて……

ただ、そのあとが続かなかった。医療系のマンガを描きたかったので、次は看護師さんを主人公にしたものを描こうと思ったんです。でもまとまらなかった。自分の中に引き出しを作れなかったんです。

でも、「ふしぎな仲間たち」をやることで、作家として作品を描くことから、編集デザインして本を作ること、印刷製本すること、書店を回って本を置いてもらうよう交渉すること、返品を回収して集金することなど、本作って売るまでの行程を一通り経験することがでました。この経験がその後の自分のマンガとの関わり方に大きな影響を与えてくれたと思います。

文・新つれづれ草第7号掲載「つれづれインタビューマンガびと」より抜粋加筆

田村 仁くんのこと

「ふしぎな仲間たち」の共同発行者の田村くんの話をしたい。

本名、田村 仁（ペンネーム、田村良介）

田村くんと初めて会ったのがいつ、どこでだったか覚えていない。

雑誌COMの同人誌特集で、田村くんがメンバーだった「墨汁三滴（名誉会長・石森章太郎）と私がメンバーだった「つれづれ草」が紹介されたことがあった。たぶんそれがきっかけで、新宿のマンガ喫茶「コボタン」で合同原画展を開催したことがある。そのころ2人は会っていると思うが、具体的にはまったく記憶がない。

デビュー作の「悪魔の水」の時、一部背景を描いて頂いていると思うのだが、どこをお願いしたかはっきり思いだせない。

鮮明に記憶に残っているのは、秋田書店で発表した「道具」と「よわむし」の2作だ。全面的に背景を田村くんに描いてもらっている。「ペンが走る様に描く」と言うのを彼に見せてもらった。

とにかく描くのが速い、どんな無理な構図をお願いしてもあっという間に描き上げてくれた。そのうえヘビースモーカーだった。一晩徹夜すると、机の上の灰皿の上にタバコの吸い殻が山の様にたまり、最後には灰皿が見えなくなって巨大な吸い殻の山になってしまうのが常だった。

田村くんにアシスタントを頼むために電話を掛けた時に、「その日は知り合いのバンドでベースをたのまれているのでダメだ」と断られたことがあった。マンガを描きながらエレキギターも弾ける田村くんをとてもうらやましく思った。

後日「ふしぎな仲間たち」掲載予定の原稿が間に合わないので、田村くんの実家へ仕上げを手伝いに行ったことがある。「これがいいから聴いてく

れ」と「はっぴいえんど」のLPを聴かせてくれた。残念だが当時の私にはピンと来なかった。私は「よしだたくろう」や「かぐやひめ」の方が好きだった。

「ふしぎな仲間たち」発行へ

「ふしぎな仲間たち」を始めた動機は、私の場合は「負けずの大五」の失敗で失った自分のマンガを発表する場所を作るためだった。

田村くんの場合は、同人誌「墨汁三滴」の仲間は、石森プロで石森章太郎氏のアシスタントをしたり、既にマンガ家としてデビューしている人もいる中、彼は石森プロには入らず独自の道を進もうとしていた。しかし、彼が描きたい世界やキャラクター達を認めてくれる出版社を見つけることが出来ず、マンガの世界で売れることに疑問を感じていた時だったと私は思います。田村くんもこの時点では、自分のマンガを発表する場を作りたいという私の提案に積極的に賛同してくれたのだと思います。

「ふしぎな仲間たち」の1号は、私も田村くんも、集まってくれた個性あふれる若いマンガ家たちも、マンガ家として自分のマンガの発表の場を作るという、同じ志で作った雑誌だったと思います。

「ふしぎな仲間たち」の1号に「つれづれ草」のメンバーは参加していない。既にマンガ家としてデビューしていたり、マンガ家のアシスタントとしてマンガ家としてそれぞれの道を歩んでいたからだ。

２０００部作った1号は、区民まつりに参加して手売りしたり、アニメの自主上映会やフォークコンサートの会場の外で、毎週の様に出かけていってチラシをくばったりして、徐々に支援の輪ができ、現金書留で購読申込が届いたりする様になり、1年余りで完売することができた。

1号が売れればその売り上げで2号が出せるかも、と言う夢が実現し、新しい描きても加わり、2号が発行できた。

これは新しいマンガ雑誌なんだ

田村くんが実家を出て、豊玉にアパートを借りて、そこを編集部に提供してくれ、「ふしぎな仲間たち」の発行所になりました。それまでは、私の実家が発行所でした。

2号は、雑誌や新聞の取材を受けて紹介されるなど、支援の輪は全国に広がって行きました。私は情報誌の「ぴあ」や「シティーロード」の販売書店のリストを見ながら、書店回りをして、置いてくれる書店を増やして行きました。

訪ねた書店は比較的好意的な対応をしてくれ、七掛けで委託販売を受けてくれたのです。次の号が出来た時に、前号の返品を受け、精算して売れた分の7割を支払ってくれる形でした。

ショッピングカートに本を詰めて、電車と徒歩で書店を回りました。

半年あまりで2号を売り切り、3号を発行できるようになりました。

3号から2カ月に一回発行する、定期刊行物にすることにしました。

その際、毎号編集者として作業をしながら、マンガの新作を書き上げるのは難しいことに気がつき、マンガ家として関わる号と、編集責任者として関わる号を、私と田村くん2人が交代でやることにしました。

2人の中で「ふしぎな仲間たち」が自分のマンガを発表する場だけでなく、志あるマンガ家が誰でも作品を発表できるマンガ雑誌にする目標を、はっきり意識した時だったと思います。

5号から完全に2カ月に一回発行の隔月刊となり、1976年6・7月号と月号表示にしました。

定期刊行物にしたことで、発行した時にどれだけたくさんの書店に本を置いてもらえるか、そして必ずある返品も発生するようになりました。1号を発行した時の、売れたお金で次の本を作るという考えは成立しなくなっていったのです。

共同発行者としての田村くん

田村くんは、これからは個人的な手売りではなく、書店などと広く取引をしていくために「ふしぎな仲間たち編集部」を法人化する必要があると、「有限会社ふしぎな仲間たち社」の設立に奔走したり、志を持った新しいマンガ家探しに時間を費やする様になっていきました。

私は、編集デザイン、印刷製本、書店回りを中心に動く様になっていき、自然に、「ふしぎな仲間たち社」の中で2人の立場が分れる様になっていきました。

「有限会社ふしぎな仲間たち社」が設立でき、単行本も私の「負けずの第五」山口麗子さんの「すてきなおくさん」西沢恵子さんの短編集の3冊を発行することができました。

しかし、隔月刊の定期刊行物になってからは本を完売することができず、結果返品のなどによる赤字が溜まっていく様になっていきました。

田村くんは「ふしぎな仲間たち」を既存の雑誌取次店を通して、全国の書店に置いてもらえる様にするために、ある出版社にお願いして、委託販売というかたちで取引き出来る様交渉し、実現間近になっていました。

しかし、印刷所への未払いが１００万円を超えた時に、印刷所から「これ以上協力できない」と言い渡されてしまい、ふしぎな仲間たちは、１９７７年3月発行の3・4月号で休刊することになってしまいました。

その後の田村くん

田村くんは、マンガ家田村良介として、「とびっきり宗一郎」1985年週刊少年チャンピオン、「ファミコン八犬伝」1986年週刊少年チャンピオン、「学園戦士牛若スクランブル」1987年スーパーボンボン等を発表、書き下ろし単行本は「マンガ　原価計算入門　材料費労務費経費のしくみ」サンマーク出版など多数。

私が編集者として関わった、徳間書店のわんぱっくコミックでは、書き下ろしで「必勝テクニック完ペキ版⑲ドラゴンバスター」1985年や、読切作品を描いてもらいました。

必勝テクニック 完ペキ版⑲ドラゴンバスター（わんぱっくコミックス・徳間書店刊）田村良介・著
1987年2月発行